

---

# 青空の下。

岬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青空の下。

### 【Zコード】

N7783B

### 【作者名】

岬

### 【あらすじ】

ひとり欠けてしまった、一人の話です。

親友の彼女を好きになった。でも、2人とも好きだったから、いわざよく身を引いた。

よくある話だと思いつ。

けど、やっぱり悲しくて苦しくて申し訳なくて、しばらく泣いてしまった。

それでも。

そんな俺でも、平氣だつたんだよ。2人が、一緒にいることを許してくれたから。

なのに、どういうわけだ。

俺ととーかちんを置いて行くなんて。藤夏を任せた、なんてそんなセリフ、嬉しくもなんともねーよバカトシ。

\* \* \*

見上げた空は、どこまでも青い。こんな空を見上げると、嫌でも思いだしてしまったやうがいる。トシ。お前はこの空のどつかにいるというんだろうか。

いつも漫つてしまつ後ろ向きな感傷は、半年経つた今でも、まだ健在なようだ。

学校の屋上で、たつたひとり。

手に持った菓子パンを食べる口は一向に進まない。

だつて不味いよ。3人が1人になるだけでこんなに違うのかと、妙に感心してしまつくらい。

あーあ、はやまたかな。

まだここは駄目だった。思い出しちゃうんだよ、楽しかったあの

時とかあの時を。

俺は、ながば食べる」とを諦めて、固にコンクリートの上にんだらりと手足を投げ出した。じこまでも高い空を見上げてみると、もひへ何もかもじつでもよくなる。例えば午後の授業とか。

不真面目な考へで田を閉じると、キイ、と屋上のドアの耳障りな音がした。

誰だ。

でも起きるのもめんどくさい。

ぐだぐだと寝そべつたままでいると、急に辺りが暗くなつた。面倒ながらうすら目を開くと、突然影が落ちた原因がすぐにわかる。田の前の見慣れた人物のしわざだ。

「あー……とーかちん」

「あら朝ぶりじやない、コタカちやん」

全開の笑顔を見ながら、そここや屋上で会つのはこなくなつてから初めてだな、と思つた。

\* \* \*

「こんなところで何してんの。サボリ?」

「そーだよ。気持ちいいじゃないこんな天氣いいし」

「まあここの身分ですこと」

フーンスの前に、隣り合つて言葉を交わす。何してんだろう、と思わないでもない。すでに5限田は始まつた。

でも、俺もとーかちんも何も言わない。だからいーんだそれで。少し言葉のやりとりをすると、俺もとーかちんも何も言わなくなつた。すぐに屋上に静けさが満ちる。

それは嫌いじやない沈黙。とーかちんとか……トシと一緒にだつた

「それにしても、ああ」

と一かちんが、ぱつりと言った。

「こんな空見ると、信じられないねえ、アイツがいないなんて」

「……うん」

「バカだつたし、何度も死んでも死ななそうなヤツだった

ほんとにね。

ちら、と一かちんの方を見ると、透き通った瞳でフェンスの向こう側を見つめていた。

「……じゃないどこか、きっとトシのいる場所を見つめるんじゃないかな、と思った。だつて、綺麗過ぎて今にも消えてしまいそうだよ。最後に見た、トシの笑顔にどことなく似ている。

俺も、フェンスの向こう、空の彼方に田を向けた。

そうすれば、見える気がした。

と一かちんの見るもの。トシの居る場所。

漠然と、きっと明るくてきれいで、こんな青空みたいな所なんじやないかな、と思つ。

でも、いくら田を凝らしても、空の青以外なんにも見えなかつた。

「だけど、もういないんだよね」

しばらくして、と一かちんが小さく言つた。

「いないんだよ。こことか、よく私達がいた場所に来ると、はつきりわかるんだ」

その声は震えていて、何となく、顔を見てはいけない気がした。言葉の代わりに、と一かちんの肩に寄りかかると、俺にも重みがかかる

かつた。

「いなにのに、ね。青い空を見るだけで、そこでアイツが笑つてゐような、そんな気がするんだ」「ばかだよね、と乾いた笑いをもらすと一かちん。

「じゃあ、俺もばかだね」「うん、コタカもバカ」

聞いかけに、即答される。

「でもセー」「うん?」「俺、トシは本当の本当のビックリするんじゃないかと思つただな」「うん、私もそう思つ」「おまけに俺らのこと見守つてゐるんぢやないかと思つ」「あらあら、奇遇ね、私もです」「そして、トシなら、ちょっとくらいくよくしてても許してくれると想つのですよ」「…………。うん、そうだね」

きつとトシなら、あの口から向も変わつてない俺らを責めたりしないだろーね。  
しうがないヤツらだ、て笑いじまじで、けつどばすだらーめつと。あのバカゆえの豪快さで。  
久しぶりにしつかりと思い描いたトシに、暖かく、けびそれ以上に苦しくなる。

「ねえねえコタカさん」

「なんだいとーかちん」

「……泣いてるの？」

「……とーかちん」「ん」

気付けば、熱いものが頬をつたつていた。

何でだろう。

トシがいなくなつて、もうそれにも慣れたはずなのに。

俺達は、お互にじつくりと顔を見合わせて、吹き出した。顔が真つ赤だ。涙どころか鼻水まで垂れてる。

そんなとーかちんの顔を見ながら、その隣にいる、トシの姿を描いてみた。こんな青空にふさわしい、思いきり笑顔の。

ああそうか。と、何となく思った。

そうか、悲劇の人でも美化した思い出でも何でもない、いつものトシを思い出したのは、今日が初めてだ。

明日も明後日もいつまでも続くと思っていた日常の中のトシ。  
「じめんね、いつものバカで口が悪くて乱暴者のへせこ、他のヤツのことばっか考えてるお前を忘れてて。  
やつとやつと、欠けてる部分が見つかった気がする。

トシ、「じめんね、ありがと」。

それから俺ととーかちんは、泣いた。ずっとずっと、時間がわからぬくらい。声を張り上げて、ときどき罵声を吐きながら。

とーかちんも、同じ気持ちだったのかな。

こんな泣いたのは、初めてだった。いなくなる前も、その後も。不思議だ。

苦しさだけ、溶けて流れて行く感覚がある。

だつてトシはここにいるんだよ。

楽しかったときも、辛かったときも、消えたりなんかしない。

だからトシ……これからもよろしく。

\*\*\*

「あーあ、泣いた泣いた！ もう意味分かんね！」  
「いつの間にか暗いし！ 意味分かんね！」

どれくらい経つたのか。気付いたら、辺りは、既に日が隠れて薄暗かった。どこからともなく、カラスの鳴き声が聞こえるのがちょっとせつない。

「もう、こんなのは初めて！」

「俺もだねー！」

「でもすっかりした気が、しないでもないーーー！」

「どうちだよ！ でも俺もそんな気がしないでもないーーー！」

言い合って、ゲラゲラ笑いあう。

本当にもう、何がなんだか分かんない。

ただ、確かに分かることは、変にふしきれたこと。忘れるんじゃない、受け入れただけ。これからも、そのまんまのトシヒト一かんと、生きていくために。

あと、もうひとつ。こんな一瞬がたまらなく愛しいこと。

……くさいこと考へてる辺り、俺もけつこういかれりやつたのかもしぬないけど。でも、嘘じやない。

「なー、とーかちん」

「ハイハイ何ですかユタカくん」

「また明日もようじへ

「何、急ご

「明後日もしあせつてもやの次の日もようじとよのうじへ

「……こーみ、ようじくね

(後書き)

2人の恋というよりは、3人の繋がりを書きたかった話でした。  
カテゴリはこれでいいのかどうか悩みますが。  
ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7783b/>

---

青空の下。

2011年1月27日09時59分発行